

白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす

深堀 骨

先頃、不慮の事故で急逝された作家・西爪一馬氏の書斎より未発表の遺稿が発見されたことは、新聞の記事等で本誌の読者の皆様は既に御存知のことと思う。そこで今月号の本誌『文藝道草』では、巻頭に「西爪一馬特集」を組み、この西爪氏の遺稿『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』を全文掲載するとともに、落陽大学文学部教授にして文芸評論家、そして西爪一馬研究の第一人者でもある野々村澹瓶氏にこの遺稿発見の経緯と、西爪一馬研究に与える意義についての文章を寄稿して戴いた。また、『温泉卵が降ってくる』で昨年の第四回文藝道草新人賞を受賞し、最近書き下ろし長編『雛形あきこは狛犬のやうに』を発表したばかりの気鋭の作家・富永突貫小僧氏に西爪氏の作品の魅力についての文章を語って戴いた（富永氏は長年西爪氏の作品を愛読してきたそうである）。そして特集の最後を飾るに相応しい企画として、西爪氏と親しかつた作家の才鈴木隆氏（アイルランド系）と文芸評論家のマク佐藤宏氏（スコットランド系）に生前の西爪氏の肖像について、またこの遺稿『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』を中心に西爪氏の作品世界に関して

対談して戴いた。

白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす

西爪 一馬

キーポツポ

『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』 発見顛末記

野々村澁瓶

(落陽大学文学部教授・文芸評論家)

西爪一馬氏に未発表の作品が存在している可能性は殆どないであろうというのが、私も含めて文壇一般の意見であつた。西爪氏が本誌に『時雨蛤日記』という日記形式のエッセイを連載していたことは、本誌の愛読者なら御存知のことと思うが(この中断の形で終つた『時雨蛤日記』が結局事実上の西爪氏の絶筆となつた訳である)、この『時雨蛤日記』にも最後の創作(未完)となつた『あしうらない』のことには触れてあつても、その他の創作に關しては一言も触れてはいなかつたし、生前の氏の性格からしても、一文の得にもならない文章などを態々書こうとは思われないからである。

しかし、先月(五月)上旬の夜、私が自宅の居間のソファに寝そべりながらレミー・マルタンのグラスを片手に愛するスージーと『すつごく淫らなタツノオトシゴの痴態』と題した映画をヴィデオで鑑賞していた際に、西爪氏未亡人のキヨ子夫人より電話がかかり、氏の書齋を整理していた折に未発表の原稿らしきものが書棚の奥に仕舞い込んであつた『菅野美穂写真集』の間から出てきた、ついでには野々村さんにお知らせしてどうしたらいいか判断を仰ぎたい、と聞いた時には、意外の念に打たれるとともに、激しい興奮が躰中を駆け巡るのを抑えることが出来なかつた。早速私はブウブウ文句を云うスージーを宥め、西爪邸に急ぎ馳せ参じた。

玄関でキヨ子未亡人は東南アジアの土産物のような顔をして私を出迎えてくれた。「これです」と云いながら私に差し出した原

稿は極く枚数の少ないものであり、読むのに一分もかからなかった。

「なるほど」私は頷いた、「間違はなくこれは先生の遺稿のようです。それでは申し訳ありませんがこれを当分の間私にお貸し戴けないでしょうか」夫人は快諾した。

「それともうひとつ、この原稿が挟んであったという『菅野美穂写真集』もお貸し戴けませんか」

「そんなものどうするんです」夫人が不審げな顔をしたので「研究のためです。何故先生がその写真集に原稿を挟んでいたのか、その理由も探ってみたいのです」結局写真集も借りることに成功した。その後、私がこの遺稿を活字媒体に掲載することに関し未亡人に了承を貰い、本誌編集長に電話をしたことは云うまでもない。

それ以降の私は、遺稿『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』と『菅野美穂写真集』を検分することに日々を費やしたが、最大の問題はこの遺稿が果して完成した作品であるのか、それとも未完の断片であるのかについてである。

遺稿はたった二枚の四百字詰原稿用紙をホチキスで止めたに過ぎないものである。先ず一枚目には大きく「白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす」と三行に亙って万年筆で書かれており、その左下にそれよりはやや小さく「西瓜一馬」と署名してある。そして問題が二枚目で、中央に万年筆で馬鹿でかく「キーポップ」とのみ書かれ、それ以外には何も書かれていないのである。

当初これはただの悪戯書きに過ぎないのではないかという思いが頭を掠めた私であったが、思い返してみれば、氏の作品が近年通常云われる小説の形態を著しく逸脱した方向に向かっていたことは紛れもない事実なのである。

抑々、西瓜氏は××年のデヴュー作『壁のしみを見つめて』で正統的な私小説の書き手として登場し、以後もその分野での数少ない継承者のひとりとしての活躍が目立っていた。それがある時期からその作風に変化が見られるようになってくる。この点に関しては、例えば××年発表の『冬の汐干狩』が、発端は通常の私小説風に始まりながら（つまり西瓜氏とおぼしき作家の日常の描写で始まる）、半ばにして唐突に魔法使のお婆さんが登場し、主人公を西城秀樹（それも『傷だらけのローラ』を歌っていた頃の）に変えてしまうところから話は意外な方向へと展開していくし、また同年発表の『冬の汐干狩・望郷篇』は、これまた私小説風の発端ながら、中盤に於いて主人公が実はフランク・シナトラの隠し子であることが唐突に判明するや、後半は主人公が歌手として成功を収めるまでのド根性サクセス・ストーリーに変化してしまう意外さである。

しかし、こうした流れを決定づけたターニング・ポイントとなるのが、良くも悪くも後期の最大の問題作である『お豆でポン』であることは間違いない。『お豆でポン』が今尚毀誉褒貶半ばするるのは、文学上の実験と呼ぶにしてもあまりにもあんな内容（或いは内容のなさと言うべきか）——つまりは「ポン ポン ポン お豆でポン」というフレーズが全篇百五十三回に亘って繰り返されるのみという——に因るものであり、発表当時一大センセーションを巻き起こしたのは記憶に新しいところでもある。

その当時の私の記憶では、某作家がこの作品に関して「西瓜のジイサン、アルツなんぞでねえの」との暴言を吐いたとか吐かなかったとかいいう噂が流れたとか流れなかったというようなことを聞いたような聞かなかったようなことがあったようななかったような感じだったという風に覚えているが、それに代表されるような意見が大半を占めたことは確かであった。

この流れから見れば、遺稿『菅野美穂写真集』が、もとい、遺稿『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』が歴とした文学的意図を以て書かれたものであるという推測も出来ない訳ではない。但し、それでも

「キーポツポ」一言のみというのはかなり意表を突いている。これが本文なのは先ず間違いないにしても、単なる書き出しだったのか、それともこれで完結した作品なのか（完結しているとするれば、本文が題名よりも遙かに短いという希有な作品ということになる）、その辺りの判断に関しては未だ結論を見ない。ただ、「白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす」という題名と署名が書かれた表紙用、それに「キーポツポ」の原稿用紙計二枚のみがホチキスで止められていたということは、これが既に完結した作品なのではないかとする有力な意見ともなっているのは事実である。

仮にこの遺稿『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』が完成した作品であるとするならば、西爪氏のこれまで辿ってきた作風の変遷のひとつの到達点として、大きな意味を持つてくることは確実なことである。そして、この「作品」を評価するか、或いは批判の対象とするかを問わず、今後の西爪一馬の作品研究に非常に大きな意義があることは疑いのない事実であろう。また、この作品の孕んでいる謎、例えば「白熊座」という架空の星座の意味、何故真夏の夜に舌を鳴らすのか、「キーポツポ」とは何を意味するのか、舌を鳴らす音なのか、といった問題点に關しても今後の諸氏の研究を待ちたいと思う。

尚、『菅野美穂写真集』は私の留守中にスージーによって塵紙交換に出されてしまったことを付け加えて、この稿を終らせて戴くこととする。

西瓜先生、ありがとう

富永突貫小僧（作家）

僕がまだ作家になる前のことだ。

その頃僕は業界紙の記者をしていた。『七五三縄海老新報』と
いって、正月の七五三縄の天辺に飾る海老を作る業界の新聞だっ
た。来る日も来る日も七五三縄の海老のことばかり書いていた。
それで飯を食っていた。每晚見る夢の中に巨大なハリボテの海老
が出てきて僕を食べた。前は好物だった海老が食えなくなった。
海老フライも海老ピラフも海老バーガーも嫌いになった。首まで
海老に漬かった生活だった。そんな生活が長く続く筈もなかった。
ある朝起きたら、頭は痛いし胃は痛いし全身に蕁麻疹が出来るし
で、お医者様に診てもらった。

「自律神経失調症ですね、」柳沢真一に似た顔と声のお医者様は
アツサリと云った、「それも海老系です」

「自律神経失調症に系とかあるんですか」

「昨日来た患者さんなんかは猫系です、」お医者様は云う、「そ
の患者さんも業界紙の記者でした。『招き猫特報』とかいう、招
き猫を作る業界の新聞記者だそうで、来る日も来る日も招き猫の
ことばかり書いていたせいで猫の肉が食べられなくなったそうで
す」

「どうすれば直りますか」

「海老漬けの生活を止めることですか」そこで僕は仕事を辞めて
無職になった。

躰の不調は嘘のように直ったが、心の方は何とも宙ぶらりんな
塩梅だった。気を紛らわすために本を沢山読んだ。その沢山読ん
だ本の中に西瓜一馬の短篇集『フラスコとタバスコ』があった。

僕にしてみれば暇が潰せるために手当次第に読んだ読んだ中の一冊に過ぎなかつたのだが、読み終えた時に僕は変つていた。(作家になろう)

そう、心に決めた。そして僕は作家になつた。無論それまでには様々な紆余曲折があつたがそれは取り敢えず措いておこう。

つまり西瓜先生は、僕が作家になるキツカケを作つてくれた大恩人なのである。

何故あの本を読んだ時に僕はそう決意したのか。あの本は西瓜先生の第一短篇集で、先生のデヴュー作である『壁のしみを見つめて』も入つていた。今でも僕はあの小説が大好きだ。宙ぶらりんだつた僕の心にあの小説が洗い立てのワイシャツに落ちた焼き肉のタレのように滲みだした。

『壁のしみを見つめて』の主人公はあの頃の僕と同じだつた。宙ぶらりんの境遇で、常に心に不安と焦りを懐き、何かを成し遂げなければならぬと思ひながらも日々を無為に過ごしてしまふ、そんな主人公にすんなりと自分自身を重ね合わせることが出来た。それに主人公の名前が「長谷川正直入道」と云うのも好感が持てた。僕の名前も相当な珍名だが、実を申してこれでも本名なのである。子供の頃は苛められたものである。大人になつても苛められている。『壁のしみを見つめて』の「正直入道」も名前のために子供の頃から苛められていた。西瓜先生の本名が「西爪頓智坊主」という名だということを知つたのは大分後になつてのことであるが、それを知つたことによつて僕は益々西瓜先生のファンになつたことは云うまでもない。

それに加えて西瓜先生の文章がまた気に入つた。読む者に小説を書く意欲を湧かせる文章なのである。妙に構えたところのないと云おうか、ひねり過ぎないと云おうか、直截的と云おうか、工夫がないと云おうか、こんなもんなら俺でも書けると云おうか、

兎に角そんなステキな文章なのである。僕は小説家という人種は皆、小難しい頭の痛くなるような文章を書くものだという思い込みがあつたので、それがこうも易々と打ち破られたのは痛快であつた。そして僕は軽率に作家になろうと決意し、そして軽率に作家になつた。これらは全部、西爪先生のお蔭なのである。

僕は生前の先生とは遂に会話を交わしたこともなく終つてしまつた。パーティの席でお見かけしたことはあつても、相手は文壇の大御所であり、こちらは駆け出しのペエペエ、緊張して話しかけることなど出来なかつた。是非一度でいいから、先生に僕がファンであること、先生のお蔭で作家になつたことを云つておきたかつた、それが心残りでならない。しかし僕は緊張すると失言をする癖があるため、いざ先生と話す機会があつたとしても、「先生の文章はクセがなくてマツタリしてます」とか云つて御不興をかう結果に終つていたかも知れない。西爪先生に対して単なる純粹な一ファンでいられたことを喜ぶべきなのかも知れない。

僕のデヴュー作となつた『温泉卵が降ってくる』という小説は実は西爪先生へのオマージュなのである。主人公は『壁のしみをみつめて』の「正直入道」と同様の、宙ぶらりんで心に不安と焦りを懐きながらも無為な日々を過ごしている、そんな男である。つまり以前の僕であり、或いは昔の西爪先生であるかも知れない、そんな男である。僕はそんな詮ない男の再生を、空から絶え間なく降ってくる温泉卵で主人公がズルズルのベチヨベチヨの姿になるラストシーンで描き切つた自信がある。その点を評価されたかどうかなのか、この小説で僕は新人賞を戴いた。とても嬉しかった。でも審査員に西爪先生はいなかつた。ちよつと寂しかった。今となつては、先生が僕の小説を読んでいたのかどうかも聞く術を持たない。

今回、『文芸道草』編集部の御好意で、先生の遺作『白熊座の

女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』を読ませて戴いた。

とても読みやすかった。一分とかからずに読めた。本文よりも題名が長いという大胆かつ単なる思いつきの域を出ない奇抜な構成は、大らかで細部に拘泥しない西瓜先生ならではの持ち味である。これはこれで芸術的だと思う。他の読者はどう思うか知らないが、僕には充分面白かった。でも、面白くないひとがいたとしても僕には関係ない。

僕が作家になるキツカケを作ってくれた西瓜先生。僕を含めた多くの読者を笑かしてくれた西瓜先生。その上ケツサクな遺作まで残してくれた西瓜先生。天国か地獄か知らないけれど、あの世で元気に過ごしているに違いない先生に声を限りにこう叫びたい。西瓜先生、ありがとう。

(対談)

西瓜一馬は二十一世紀に羽搏く軍鶏になれるか？

才鈴木隆（作家・アイルランド系）

マク佐藤宏（文芸評論家・スコットランド系）

死に方は間抜け

才鈴木隆（以下才） 西瓜が死んでどのくらいになったっけ。

マク佐藤宏（以下マク） そろそろ一年近く経った頃でしょう。

才 しかし死ぬのは一向に構わないとしてあの死に方は凡そ滑稽だったな。隕石のカケラが頭に当って死んだんだよね。

マク いやいや、隕石じゃなくて人工衛星。人工衛星のカケラが
当って死んだんです。

オ 如何にもあの男らしくて死に方まで間抜け。俺、葬式で笑い
を堪えるのに必死だったよ。

マク それは皆そうだったんじゃない。

オ そうだったんだやっぱり。俺だけ吹き出しそうになったた訳
じゃなかったんだ。

マク 西瓜さんが死んで悲しむ人なんかいないでしょ。

オ そりゃそうだ。でもだからと云って西瓜が皆に嫌われてたっ
て訳でもないんだから。

マク いや、あのひとのこと本気で嫌ってたって人もいなかった
と思う。

オ 嫌う程のこともないという(笑)。

マク あのひとを本気で嫌ってたらそれこそバカみたいでしょ
(笑)。

編集部(以下編) あのう、すみません。この対談は一応西瓜先
生を偲ぶ企画ということになっておりますので、そこんとこどう
か。

オ おっと、これは失敬。つい話が弾んじゃって。

マク 西瓜さん程話の種に困らないひとと珍しかったからね。こ
れもひとつの人徳と云えますな。

オ そうそう人徳人徳。上手いこと云うね。

マク あれだって間違いなく人徳ですよ。

スイカ事件

オ このつきだしは蓴菜だな。

マク あ。私は駄目なんだ蓴菜。

オ 蓴菜嫌いかね。

マク 私は又ル又ルしたものは何に寄らず駄目なんですよ。

オ それは初耳だ。だがお風呂屋さんにはよく行くらしいじゃないか。

マク 何の話ですかね。

オ 又ル又ルしたお姐さんのいるお風呂屋さんのことさ。

マク 知りませんね。そちらこそキャバクラで自分の娘よりも若いコを肘鉄喰わされらしいじゃないの。

編 すみません。西爪先生のお話をして戴けますか。

オ そうだった。

マク エヘン。西爪さんと云えば先ずスイカですね。

オ それは云えますな。

編 スイカと云いますと。

オ あれ、君知らないの。

マク この業界で飯食っててスイカを知らないとはね。驚いた。

オ このこの編集者になってどれくらい。

編 今年入社したばかりなんです。

オ そうなんだ。いやどうもね、『文芸道草』の編集部にこんな可愛いコがいたつけかときから気になってたんだ。君名前何ていうの。

マク オ鈴木さん好加減にしときなさいよ。またあんたの悪い癖が始まった。編集者をキャバクラの女の子扱いしちやいけないよ。全くこれだからアイルランド系は。

オ うるさいな。スコットランド系はスコッチ飲んでバグパイプ

吹いてお風呂屋さんに行ってるよ。

マク 何だこのIRA野郎。そっちこそアイリッシュウイスキー飲んでキャバクラの女でも口説いてな。

編 ちよ。ちよっと。喧嘩は止めて下さい。

オ まあいいや。後で名前教えてね。

マク 教えない方がいいよ。このジイサンはこの歳でまだ現役だとかホザいてるからね。

編 お願いですから。

マク はいはい。何の話だっけ。

オ スイカだろ。

マク そうだスイカだ。

オ 西瓜の書いた短篇が雑誌に載ったんだ。この雑誌じゃないけどな。

マク その時の著者名が『西瓜一馬』じゃなくて『西瓜一馬』になってたのよ。

編 まあ。

オ 西瓜のヤツったら怒った怒った。傍で見てて笑ってしまうくらいに怒ってた。

マク 俺はスイカじゃねえってね。俺は海辺で目隠ししたヤツに頭叩き割られなきゃいけねえのかって。

オ 俺は塩かけられて齧られるのかって。

マク 俺は網に入れられて土産物にされるのかって。

オ で、この話の何が可笑しいかって、実際に西瓜の顔というのがスイカみたいなんだよな。

マク その上あのひとの本名が凡そ巫山戯た名前でしょ。「西瓜頓智坊主」だって。親は何を考えてたんだか。だから子供の頃から顔と名前の両面で揶揄われてたらしい。

オ 首にボウリングのボウル乗つけてるみたいなんだ。それに顔色が悪くて殆ど緑色なんだ。

マク 縞模様なのよ。

オ 昔『バカな猫』であつたじゃない。

編 あのう。すみません。『バカな猫』と云いますと。

マク 君ホントに何も知らないんだなあ。

オ まあそう云いなさんな。今度薬座丸君に連れてつて貰うがいさ。『バカな猫』というのは要するに文壇バアってヤツだ。そこで昔我々が飲んでた訳だ。その時いたのが私とこのスコティッシュと西瓜と後二人くらいいたか。

マク 野々村さんもいましたね。後一人は忘れた。

オ その時に西瓜が酔つ払つて隣のテーブルの客と喧嘩をオツ始めちまつて。

マク でもあのひとは喧嘩弱いから。

オ おまけに相手が元ボクサーで。

マク ノサれちゃつて。

オ テーブルの角に頭ぶつけて。

マク 頭が割れちゃつて。

オ 血が流れたんだ。それがまた割られたスイカそっくりでね。皆介抱もしないで笑つてた。

口臭がひどい

マク 後、西瓜さんを語る上で忘れてはならないのが口臭ですな。オ それはもう云うまでもないでしょう。あいつが死んで何がホツとしたと云つて、あの匂いをこれからは嗅がずに済むというのが何よりものことよ。

マク 君さ、西瓜さんに会ったことないんだよね。

編 あ、はい。

マク いやあ、君ホントに運が良かったよ。あの口臭を嗅いだことのないライフというのは全くラッキーとしか云いようがない。

編 そうなんですか。

オ 和尚さん。いやさ。お嬢さん。あの男の口臭と来た日にやそれはそれはもうこの世のものとは思えぬ因果な代物だったんだ。

マク 例えばね。パーティーとかある訳じゃない。私とこちらのアイルランド系作家が蟹の爪のフライのカクテルソース和えとか喰いながら話してるとするじゃない。不図気がつくと、異臭が鼻を突く訳だ。そこで私とアイリッシュはこう云うのよ、「来ましたね」「来ましたな」。

オ パーティ会場から百メートル近く離れた廊下を歩いてても分かるんだ。

マク その異臭が次第に強くなってくる。会場にいた連中も三々五々気がついて、ハンケチで鼻を押さえたりオエツとかゲフツとか云ったりしてる。

オ そしていざ御本人が会場に登場し「ちえ〜っす」とか何とか第一声を発するや、異臭は最高潮に達する。会場の遠近でたった今胃に納めたチキンやキャビアやテリーヌを全部好み焼に作り直す人間が現れる。

マク そこでオさん、あの口臭がどないな匂いであるかをこちらのお嬢さんに説明しては如何かな。

オ え。私がかい。

マク 勿論ですよ。ここは文豪才鈴木隆先生ならではの、イエイツの流れを汲むケルトの血を騒がせる文学魂であの口臭の凄絶さを語って戴きたいものですな。

才 全く君は煽てるのが上手いんだからな。昔君に似た男に女郎屋で会ったよ。まあいいさ。お富さん。いやさ。お嬢さん。君は料理は作るかね。

編 あ。はあ。人並には。

才 得意な料理は何かね。

編 あのう。それが何か。

才 いいから。得意な料理は何だ。

編 え。ええ。牛肉のカルパッチョとか。

才 何だそれ。オペラ歌手か。それともボリシヨイ・サーカスカ。

マク そういう料理があるんでしょ。

才 カレーとかは作らないかね。

編 たまには作りますけど。

才 カレーを作り過ぎて腐らすこととかもあるだろう。

編 いえそれはないですけど。

才 嘘だ。カレーは腐らすものだ。

マク そういうことにしときなさい。

編 そういうことにしときます。

才 私も若い頃は自炊などしていた。自炊と来ればカレーか豚汁だ。特にカレーはジャガイモが入ってるだけあつて早く腐る。ジャガイモは脚が速い。メロスよりも速い。江戸時代にはジャガイモは普及していなかった筈だが、もしあつたら飛脚問屋はジャガイモを雇ったことだろうて。だから理の当然として直ぐ腐る。腐ったカレーは凄い。私も永いこと生きてるが腐ったカレーに匹敵する凄いものはそうはない。腐ったカレーの匂いたるや筆舌に尽くし難い。また見た目が凄い。あれが喰い物だったとは思えない。喰った後にしか見えない。見た目と匂いが相乗効果を上げてそれはもう。

編 その辺でいいです。

オ 西瓜と初めて会った時に私は大袈裟ではなく衝撃を受けた。腐ったカレーに匹敵する凄いものが存在するという事にな。カ
ルチャー・シヨックとは正にあのことだ。ヤツの口臭は明らかに
腐ったカレーの系統に属するものであった。しかし敢えて云えば
「腐った『腐ったカレー』」といった感じか。いやそれでは弱い。
「腐った『腐ったく腐ったカレー』」と云うべきだな。想像が
つくかね。

編 つかない方がいいです。

マク いやあ。流石ケルトだ。

『お豆でポン』の魅力

マク これは海老しんじよだな。湯葉で包んで干瓢で巻いてある
のか。

オ 私は海老は嫌いなんだ。

マク へへえ。アレルギーか何かで。

オ あれは虫だ。

マク 海老は虫じゃないでしょ。

オ じゃあ何だと云うんだ。魚か。あんなに足が一杯生えた魚な
んて考えられんぞ。足が多いというのは虫に違いない。虫を喰う
なぞ私には出来ん。

マク 蝗の佃煮とか喰いませんか。

オ 喰わんよそんなもの。

マク じゃあ蟹はどうなんですか。この前蟹料理屋で対談した時
は喜んで喰ってじゃないスか。

オ 蟹は虫じゃない。

マク 足が一杯ありますよ。

オ 蟹は虫じゃない。蟹は蟹だ。

マク その伝で行けば海老は海老じゃないのかな。

オ 海老は虫だ。第一、蟹は泡を吹くじゃないか。

マク アワフキムシは泡を吹きますよ。

オ 蟹は鋏を持ってる。

マク ハサミムシがどうなの。それに海老だって鋏は持ってんでしょうが。

オ 横歩きするぞ蟹は。横歩きする虫がいるか。海老はな、あれは実に蠍の仲間だ。

編 あのう。海老や蟹が虫かどうかは兎も角として、そろそろ西爪先生の作品に関してお話し戴けないでしょうか。

オ そうさな。西爪の作品な。私は西爪一馬という人間には善くも悪くも興味があつたが（例えば口臭とかな、）、あいつの書いたものはどうでもいいような気がする。

編 それでは困るんです。

オ そうなの。マク君は西爪の小説は結構読んでるのかい。

マク 私はこれでも評論家ですよ。バカにしないで下さいよ。評論家って人種は何でもかんでも読まなくちゃいけないんだから。

オ それは辛いなあ。

マク 作家と違って気楽じゃないのよ。

オ じゃあ西爪の小説も。

マク はいはい。全部読んでますよ。全部。

オ 私は君を尊敬するな。

マク 私も私を尊敬してますよ。

オ 君は西瓜の小説で何を高く評価してるんだい。

マク 『お豆でポン』はナイスですよ。

オ 『お豆でポン』を褒める奴がこの世に存在するとは知らなかったな。

マク いやいや。あれはようがすよ。

オ 何処がいいんだい。

マク あのリフレインですよ当然。

オ 英語で云わなくても良からう。つまりは繰り返してこっちやがな。

マク あれがいいんですよ。催眠術みたく。

オ 眠れるってことか（笑）。

マク あんまり小難しい作品ばかり読んで頭の芯に疲れが溜まった時なんざ、あれを読むといいんだ。スツと頭が軽くなって気がついたら熟睡してる。

オ 今度試してみよう。

マク 読者を刺激するばかりが文学の目的だとは私は思ってませんからね。ああいう文学もあっていい訳です。

オ なるほど。

マク 活字のエリック・サティとでも云えばいいか（笑）。

オ それはまた画期的な見方だな（笑）。

マク ペンとインクで書かれた小津映画とも云えましょう（笑）。

オ 本当かよ（笑）。

西瓜作品を概観して

マク 鱈の西京漬だな。これは好物なんだ。

オ 実は私もなんだ。

マク 珍しく意見が一致しましたな。

オ (編集者を見て) 君は箸をつけていないようだが。

編 魚、苦手なんです。

オ それはいけん。

マク でも海老は食べてた。

オ 海老は魚じゃないからさ。あれは虫だ。蠍の親戚だ。

マク 違うって。

編 西瓜先生の他の作品に関してお話し戴けませんか。

オ しかし私はあまり読んでないしな。

マク じゃあ対談を引き受けるなって。

オ 仕様がないうさ。私はあの男の数少ない友人のひとりだった訳だし。

マク へえ。そうだったんですか。

オ そうさ。向うがどう思ってたか知らんが、私の方では彼を友と思ってた(笑)。

マク 云いながら自分で吹き出さんでよ。

オ しかしな。あれは読んでたよ。何だっけ。題名が出て来ない。

あの。ほら。河童が出て来て八百屋から胡瓜をゴツソリ盗み出すヤツ。あれは面白かった。

マク 『愛の性生活』ですか。あれは確かに笑えますな。

オ それからほれ。狐が出て来て豆腐屋から油揚げをゴツソリ盗み出すヤツ。あれも好きだな。

マク 『愛のない性生活』ですね。あれは私はあまり買わない。

オ それとき。インド人がスーパーからカレーをゴツソリ盗み出す……

編 あのう。すみません。私も不勉強なのは反省しますが、西瓜先生の作品って全部そんなのばかりなんですか。

マク 「そんなの」なんて云ってはいけませんよ。ひとつのモチーフを少しずつヴァリエーションを加えながら何度も書いていく、これは芸術家の表現形態としては極自然なことだよ。

編 しかし私はてつきり西瓜先生って私小説作家だとばかり思っていたものですから。

オ そのとおりだよ。

編 でも今聞いたところではそうは思えないんですが。

マク そこが不思議なところでね。西瓜一馬の小説というのは、粗筋だけ聞くと凡そ突拍子もない話にしか感じられない、ところが実際に読んでみるとこれが私小説以外の何物でもないんだよ。

オ 西瓜自身らしき主人公の心象風景が延々と書かれていてな。しかもその独白たるや大したことも書かれていないんだ。昼飯に何を食おうとか。

マク 庶民派ですな。矢鱈と食べ物物の描写が多い。

オ 食い物への執着は鬼気迫るものがあつたな。それも安い食い物ばかり。蛸焼きとか。

マク いか焼きとか。

オ そんなで、あのインド人の話は何て題名だったかしらん。

マク 『勇ましいブーちゃんの冒険』です。

オ そうだった。

遺作『白熊座の女……』を読んで

オ 鳥の肉のようだなこりゃ。

マク 鶏ではない。

オ (料理を運んできた仲居に) これは何の肉かね。仲居(以下仲) 鴉ですわよ。

オ 鴉ってあの鴉かね。

仲 あの鴉ってどの鴉だか分かりませんが普通の鴉ですわよ。

オ 鴉喰うかね。

仲 鴉は食べるものですわよ。

マク へえ。何処で捕れた鴉ですか。

仲 そこら辺ですわよ。

マク そこら辺。

仲 ウチの出したゴミを漁ってたのをヒツ捕まえたんですわよ。

マク そんなに簡単に捕まえられますかね。

仲 それはもう簡単ですわよ。後ろから忍び寄って首根っこ掴んでキュツと捻るんですわよ。カとも云わずに昇天ですわよ。

マク カとも云わずにね。

仲 ウチのゴミ食べているからそれはもう栄養たっぷりですわよ。煮物にしたり、御飯にますわよ。

オ 旨いな。(編集者に) 君も今回は喰っとるね。

編 私の郷里ではよく鴉は食べるんです。煮物にしたり、御飯に炊き込んだり。

マク 君は何処の生まれだい。

編 東京です。

マク 東京人は鴉を食べるか。

編 東京は鴉が増え過ぎてますから。殊更口に出して云わないだけで、東京都民は皆食べてます。オ・

マク (声を揃えて) それは知らなかった。

編 朝早く起きてジヨギングする途中にゴミを漁ってるのを見つ
けると絞めて持って帰るんです。

仲 そうそう。こちらのお嬢さん、筋がよろしいですわよ。

編 やっぱり嘴太よりも嘴細の方が美味しいんですけど。

仲 御免なさい。これは嘴太ですよ。

編 でも嘴太も調理法次第で何とかかなりますよね。胡麻和えとか。

仲 湯豆腐もイケますわよ。

編 嘴太は結構いいお出汁が出ますから。

仲 だから今回は里芋と煮ましたのよ。

編 美味しい。私嘴太でこれだけ美味しくなるなんて思わなかつ
た。

仲 そう云って戴けるとこちらも作った甲斐があるというもので
すわよ。

編 こちらではヒヨドリは使いませんの。

仲 あら。本当にこちらのお嬢さん分かってらっしゃること
ですわよ。ヒヨドリも時々使いますのよ。ただヒヨドリは鴉よりも
小さいでしょ、下拵えに時間がかかりますしねえ、人を選ぶ素材
でございますから、仲々滅多なお客様にはお出し出来ませんわよ。

編 でも芽キャベツと一緒に薄い出汁で煮て、卵でとじた後、裏
庭でドッジボールすると結構イケるのよ。

仲 それは知らなかったのことですわよ。今度やってみますわよ。

編 冬は雪合戦でもいいのよ。

才 通な会話が續いてるようだが、西瓜の話をしなくてもいいの
かな。

編 ああそうでした。西瓜先生の。

マク 西瓜じゃなくて西瓜よ。

編 すみません。西瓜先生の遺作である『穴熊座の女

マク 穴熊じゃなくて白熊。

編 すみません。『白熊座の女は。何でしたっけ。

マク 『白熊座の女は真夏の夜にここぞとばかり舌を鳴らす』だ
る。君もちやんと覚えてから来なさいよ。

オ まあそう云うなよ。

マク アイルランド系は可愛い女の子には甘いからな。

オ しかし西瓜だってこんな長つたらしい題名つけることはない
と思うぞ。その癖に何だあの内容は。

マク 確かにそう云われても仕方のない内容ではある。

オ 「キーポツポ」はなかるう。「キーポツポ」は。それもより
によつて最後の作品だぞ。幾ら何でも、人生の最後の最後になつ
て「キーポツポ」ではな。云うなればだ、大石内蔵助が吉良邸に
討入りしたにも拘らず、上野介の首も持たずに庭にウンコして帰
つて来ただけみたいなものじゃないか。それで題名が『白熊座の
女がどうしたこうした』じゃな。本文よりも題名の方が遙かに長
いじゃないか。勘弁出来ん。

マク 全面的に賛成ですな。

オ それだけかい。

マク と云うと。

オ 反論とかしないのか。

マク しないよ。

オ じゃこれで話は終わりだ。

マク そうですね。

編 では遺作については失敗だったと。

マク そうだね。

オ そうだな。

西瓜一馬の目指したものは

仲 ではお食事をお出ししますわよ。

オ お茶漬だ。

マク しかしこれはお茶じゃないな。

仲 これはジャムですわよ。

マク 確かにそう云われればこれはジャムだな。

オ それに御飯ではないぞ。

仲 ええ。これは御飯ではなくてコッペパンですわよ。

マク とするとこれはお茶漬ではなくてジャムパンだな。

オ しかしジャムパンを何故お茶漬だと思ったんだろうか。

仲 それはお茶碗に入ってるからですわよ。

マク なるほど。

仲 お味の方は。

オ むむ。これは紛う方なきジャムパンだ。

仲 そう云って戴いて光栄ですわよ。

マク しかしお茶漬だと思って喰えばお茶漬のような気がしないでもない。

オ そこさ。つまりは「心頭滅却すれば火もまた涼し」と同じ理屈だよ。（編集者に）君はどう思うかね。

編 あのう。宜しいでしょうか。私の個人的意見を述べても、オ 構わんよ。

編 私はこれ、お茶漬ともジャムパンとも思えないんですが、マク じゃあ君は何だと思っんだい。

編 茄子とベーコンのドリリアだと思っんですけど。

マク それは新説だな。

オ 何故そう思っんだい。

編 ジヤムの中から茄子とベーコンが出てきたんです。

マク しかし私が食べてるこれには茄子もベーコンも入ってないな。

オ 私もだ。（仲居に）彼女が食べたのだけ茄子とベーコンが入ってるのはどうした訳だろうか。

仲 あらすみません。多分出入りのジヤム屋が間違えて中に茄子とベーコンを入れて来たんだと思いますわよ。

マク ところで何の話をしていたんだっけ。

オ 何だっけ。そうだ。西瓜か。次は何の話をすればいいんだ。

編 ええと。「西瓜一馬の目指したものは」ということなんです。

オ そんなこと知らんよ。私は西瓜じゃないんだし。

マク 私も同じだな。

編 では結論としては「分からない」ということで。

二十一世紀に於ける西瓜文学の意義とは

マク デザートはないの。

仲 ええございますわよ。三種類ある内からお好みのものを仰って戴ければ。

オ 何かあるのかな。

仲 アイスクリーム、シャーベット、それに海老ですわよ。

オ 海老は絶対に嫌だな。あれは蠍の親戚だからな。

マク 違うつてのに。

オ アイスクリームが喰いたいな。ヴァニラかね。

仲 いえヴァニラは生憎切らしてますのよ。

オ じゃあコーヒートかカカオとか。

仲 申し訳ありません。それもないんですよ。

オ 抹茶もないのか。苺は。キャラメルは。

仲 ありませんのよ。

オ じゃあ何があるんだ。

仲 海老のアイスクリームですよ。

オ それはいけん。他にはないのかい。

仲 ミント味のが。

オ それにしよう。

仲 ただ乾し海老が入ってますのよ。

オ 駄目だ。他には。

仲 ピスタチオが入ったのは。

オ それがいい。

仲 桜海老も入ってますのよ。

オ この店のアイスは全部海老が入ってるということか。

仲 そういうことですよ。

オ シャーベットはどうなんだ。

仲 洋梨のシャーベットは。

オ 海老は入ってないだろうな。

仲 入ってませんわよ。

オ じゃあそれにしよう。

仲 でも付け合わせに茹でた大正海老がついてますのよ。

オ それは嫌がらせか。

マク まあまあ。そんなに青筋立てて海老を毛嫌いしなくてもいいでしょ。

オ 馬鹿を云え。あれは虫だ。

マク 違うって。

オ 蠍の従妹だ。

マク だから違うって。

オ 何にも分かってないんだ。現に私は寝ている時に枕元に忍び寄って来た海老に刺されそうになったことがあるんだ。

マク 夢でしょ。

オ あ。私の云うことを信じてないな。

マク 海老は刺しませんよ。

オ 君は知らないだけだ。あれはな、刺されると痛いんだ。

マク 先生海老に何か恨みでもあるんでしょ。奥さんを寝取られたとか。

オ (無言)。

マク へえ。適当に云ったら凶星だ。海老に奥さん寝取られたんだ。

オ 馬鹿にしてるな。

編 (慌てて仲居に) すみません。じゃあ海老とは関係ないデザートを何かお願い出来ませんか。

仲 トコロテンならありますわよ。

編 それでいいです。

オ 兎に角な、海老は怖いんだ。皆そのことを知らないだけなんだ。奴等は虎視眈々と我々の隙を狙っているんだ。

マク はいはい。

編 あのう。西瓜先生の。

オ 西瓜なんかどうでもいい。今夜はとことん「恐怖と戦慄の海老の世界」について私は語りたい。君等の迷蒙を啓いてやるんだ。マク 結構です。

オ 結構じゃない。今から「恐怖と戦慄の海老の世界」を語ってやる。海老はな、あれは一見したところそうは見えないがな、実はな、巨根なんだぞ。甲羅の下に隠してるんだ。これが最大で本体の二倍にはなるんだ。ヤツは一名「サオ師」と呼ばれててな。何人の女がベッドの上で昇天させられたか分からん。それからナチス・ドイツな。実はあれも海老だ。鉤十字はな、雌雄の海老が睦み合った姿をデザインしてるんだぞ。嘘じゃない。ヒットラーもな、あれは人間じゃない。正体は海老だ。その証拠に「アドルフ・ヒットラー」というのはケルトの古い語で「川海老の唐揚げ」って意味なんだぞ。知らなかったろう。それどころじゃない。今も世界を裏で操ってるのは海老だ。それと腐ったカレーだ。政財界は海老と腐ったカレーの一挙手一投足で動いてるんだ。景気の変動は海老と腐ったカレーが年に一回七夕の日に相談して決めるんだ。それから街中でサラ金とかがやってるティッシュ配り、あれも海老だ。ティッシュの三つに一つは眼に見えない程小さな海老が隠れていて、夜中になると刺すんだ。それからテレビは危ない。テレビは危険だぞ。サブリミナルというのは知ってるだろう。あれだ。十五分の一秒の短さでな、結婚式の披露宴に出る伊勢海老のグラタンあるだろう、あれの絵が映るんだ。しかしあんまり短いから誰も気づかないんだ。人類を総伊勢海老のグラタン化する陰謀なんだ。それから正月の七五三縄に飾る作り物の海老、あれは危険だ。どんと焼で焼くと弾け飛んで顔や手に火傷をするからな。それと雨の降る日は絶対に傘をさすこと。忘れるな。ジーン・ケリーみたような真似をしてはいけん。何故ならア、雨の

粟の中にはゾウリムシよりも小さい海老がイッパイイッパイ（陳建民）潜んでいて、人間の皮膚にイッパイイッパイ（陳建民）開いてる毛穴から滲み込んで体内を無茶苦茶に喰い荒らすんだ。ココロせい。それから、よく衣しか入ってない海老の天井があるな。あれは実はな、海老が揚げられてる時に尻尾だけ置いて逃げたからなんだぞ。海老の方が蜥蜴よりも尻尾切りに関しては一枚も二枚も上手だ。蜥蜴が遠藤太津朗なら海老は内田朝雄だ。君達、九尾の海老を知ってるか。九尾の狐じゃないぞ。九尾の狐は女に化けたりして人を誑かすが、九尾の海老は新聞の勧誘に来る。新聞の勧誘は、君達、あれは九尾の海老だぞ。気をつける。それから越後の縮緬問屋の隠居の光右衛門、あれの正体は海老だ。駅前とかで「アンケートに応えて下さ〜い」とか云ってるのも海老だ。かい人二十一面相も海老だ。海老ピラフも海老だ。あれは海老だ。けじゃなくて、米粒のように見えるのも実は小さな海老なんだ。岸信介も紛う方なき海老だ。唇の辺りにロブスターが入ってた。この前喫茶店に入ったら私の膝にコーヒーをぶちまけたウェイトレスがいたが、あれも海老だ。つまりは海老だ。総てが海老だ。兎角この世は海老なんだ。それと腐ったカレーだ。分かったか、「恐怖と戦慄の海老の世界」を。

まとめ

編 で、まとめたのですが。

マク まとめ。そうねえ。「海老は怖い」ということしかないんじゃないの。

編 そうですね。